

インド北部「思春期女性の自立支援プロジェクト」における ナラティブ・アプローチの有効性

奥 川 ゆかり*

Effectiveness of the Narrative Approach in the Self-support Project
for Adolescent Girls in North India

Yukari OKUGAWA

抄 録

【目的】

本稿の目的は、ナラティブ・アプローチが JICA 草の根技術協力事業「インド北部思春期女性自立支援プロジェクト」（以下 JICA プロジェクトと省略）のヘルスキャンプに参加した思春期女性のエンパワメントにどのような影響を与えているかを明らかにすることである。

【方法】

JICA プロジェクトに参加した日本人スタッフへのインタビューを通じて、現地の思春期女性にエンパワメントを与えた語りの場面の意味と価値について分析を行った。

【結果】

現地の思春期女性に示された3つの語りの場面は以下のとおりである。

- 1) 「女性にとって勉強は不要だ」と言われた私の経験の紹介
- 2) 同年代の日本の女子学生が日常行っている月経の対処方法の紹介
- 3) JICA プロジェクトに参加した現地の思春期女性たちが、プロジェクトで得た知識を自分たちの村の仲間に教育しようとする内容を「劇」で紹介

【結論】

本稿にて、JICA プロジェクトへ参加した日本人スタッフとインド北部思春期女性との交流のなかにおける3つの語りの場面の分析を通じて、ナラティブ・アプローチが思春期女性のエンパワメントの向上に効果があったことが示された。

キーワード：開発途上国、思春期女性、ナラティブ・アプローチ、エンパワメント、多職種連携

* 看護学部 看護学科

はじめに

21世紀の今日、インドはIT関連にみる目覚ましい経済成長を遂げているが、インド社会に足を踏み入れるたび、その深刻な格差社会に気付かされる。加えて、男女格差の問題は一層深刻である。

インドの女性の健康水準や教育水準は途上国の中でも特に低く、政治や職場への参加は容易ではない。国連開発計画（UNDP）「人間開発報告書2010」によると、インド国におけるジェンダー不平等指数（Gender Inequality Index：GII）は、138カ国中122位である（日本は12位）¹⁾。本指数は、保健分野、エンパワーメント、労働市場の3つの側面から、国家の人間開発の達成が男女の不平等によってどの程度妨げられているかを明らかにするものである。つまりインドの女性は男女の不平等問題に困難な状況に置かれている。

インドでは、「女の子は将来の稼ぎ手として期待できない」「嫁ぐ際にダウリー（結婚持参金）が必要で家計に負担」などの理由から、女兒は中絶の対象となっている²⁾。男女比でみると、6歳以下の男児1,000人に対し、女兒は914人。インドでは一般的に男児が好まれる傾向が強く、選別出産の問題が深刻化していることをうかがわせる³⁾。ヒンドゥー教では女性は生涯、男に従属すべきだと説く。「幼き時は父に、嫁しては夫に、老いては息子に従うべし。げに女の自立はなしがたし」これは紀元2世紀までに成立した、ヒンドゥー教徒の行動を規定した「マヌ法典」の一節である⁴⁾。ダウリーなどの歴史的問題の根底には、「妻は、夫に無条件に尽くす貞淑な妻でなければならない」という観念がある⁵⁾。本プロジェクト地である北インドは、ダウリーの習慣が根強く残っている地域であり、思春期女性への差別問題は深刻であると想像できる。こうした地域では、「女の子だから」というそれだけの理由で、自由を奪われ、命の危険すら感じながら声をあげることさえできない。女性であることに加え、年齢が低いことも、家庭や社会で軽視される要因となっている。すなわちインドの思春期女性は、二重の差別を受ける構造になっている⁶⁾。

インド国の女性の地位向上のためには、このダウリー制度を完全に改めていく必要がある。また、女性の理想像という社会的認識を根本的に変えることも必要である。しかし、こうした歴史的な文化や風習はすぐに変えられるものではない。だから、思春期の女性が、将来妻（母）として生きてゆくために必要な力をつける取組みが必要とされているのである。

そこで本稿では、JICA 草の根技術協力事業「インド北部思春期女性自立支援プロジェクト」の実践活動の概要について報告し、続いてヘルスキャンプに参加した思春期女性にとって、どのような語りの場面が影響を及ぼしたかについて考察する。

I インド北部における思春期女性自立支援プロジェクトの概要

インド国ウッタラーカンド州デラドゥン県ヴィカースナガル地区において、多職種によるヘルスキャンプの実践活動を展開し今年で2年目となる。このヘルスキャンプは、JICA（独立行政法人国際協力機構）、MAMTA（India NGO；Mamta Samajik Sanstha）とTPAK（特定非営利活動法人地球市民 ACT かながわ/TPAK）による、JICA 草の根技術協力事業「インド北部における思春期女性自立支援プロジェクト」の企画の一部分である⁷⁾。

インド北部「思春期女性の自立支援プロジェクト」におけるナラティブ・アプローチの有効性

プロジェクト地であるウッタラーカンド州は、インドの中でも特に貧しい地域である。なかでもチャモリ地区は、海拔約2,000mのヒマラヤ連峰山麓に位置しており、村落が散在するため相互の連絡が少ないなど環境上の問題から情報の伝達が困難な地域である。思春期女性の多くは、義務教育を十分に受けることができず、彼女たちの多くは、家庭の中において、家畜の世話や家事・労働を強いられている⁸⁾。

このような背景から、インド MAMTA/日本 TPAK と JICA が協働して、「インド北部ウッタラーカンド州思春期女性自立支援プロジェクト」および「インド北部における女性達の健康・ジェンダー意識向上のためのモバイルセンターとヘルスクャンプ活動」を展開している⁹⁾。プロジェクトの目的は、前者は思春期女性が健康、栄養、衛生、リプロダクティブ・ヘルス/ライツに関する知識を生活改善普及員として自立的活動をコミュニティーで行う。後者は対象女性たちの社会参加意識が向上し、行政プログラムへのアクセスがひらかれ施策が活用されるようになる、である。

今回は、2011年2月18日～2月20日の3日間にわたってヘルスクャンプを展開した。日本のメンバーは、TPAK 近田真知子代表・バックレイ麻知子副代表・百生詩緒子相談役、インドプロジェクトマネージャー竹内かおり氏、インドプロジェクトサブマネージャー浅野美樹氏、藤田保健衛生大学医学部病理学教授堤寛氏（写真1）、梶山女学園大学看護学部学部長後藤節子氏（写真2）、浜松医科大学医学部看護学科房原篤志氏・落合郁美氏・松浦はるな氏、東洋大学英文学科竹下美里氏、筆者を含む総勢12名である。インドの参加者は、MAMTA シン代表、ジェンダーリソースセンター長ビーナ氏、地区コーディネーター6名そしてヴィカースナガル郡とチャモリ郡から選ばれたリーダーたちである¹⁰⁾。

現地のスケジュールについては表1に示す通り、1日目、2日目の活動拠点はジェンダーリソースセンター（GRC）。3日目はチャモリ県の思春期女性と一緒にバスに乗りし、

表1 スケジュール

月日	場所	主な内容
1日目 2月18日	デラドゥン GRC	<ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイキング（オーボエ演奏&歌、ゲーム） ・手洗い、歯磨きの実践指導 ・講話（2010年のヘルスクャンプの結果による健康問題：貧血、やせ、頭痛、脱水、感染症） ・ヘルスアドバイス（冷え性、頭痛、脱水の対処方法）
2日目 2月19日	デラドゥン GRC	<ul style="list-style-type: none"> ・レクリエーション（ラジオ体操、ゲーム） ・講話（リプロダクティブヘルスに関する講話） <ul style="list-style-type: none"> ①月経のしくみと月経痛の対処方法 ②女性の身体・妊娠・出産のしくみ ③「お産劇」 ・ヘルスチェック（問診、身長、体重、ザーリー法によるヘモグロビン値、体温、脈拍、血圧） ・ヘルスアドバイス（手洗い、水分・栄養補給、月経） ・グループワーク&発表 ・研修修了証書授与式
3日目 2月20日	①シェールプール村 ②マジュリ村 ③ジュドリ村 ④ラッカランワラ村	<ul style="list-style-type: none"> ・チャモリ郡の女性と一緒にプロジェクトサイト訪問 ・女性たちの活動内容視察と交流（オーボエ演奏&歌） ・ゲスト対面：初の女性村長さん、仕事に就いた女性 ・村の生活環境の観察

プロジェクトサイトで活動を展開した。研修の主な内容は、講話とヘルスチェックおよびヘルスアドバイスとお産劇である。研修のすすめ方は、講師が話した内容を竹内氏がヒンディー語に通訳し、百生氏が参加者へ研修内容を振り返りながら、質問を投げかけたり、意見を求めたりして参加型スタイルを展開した。お産劇はメンバー全員の協力を得て実施した。(写真3)

本研修は随所にレクリエーションを取り入れている。まず、インドの思春期女性全員が、「娘はみんなの宝物」という歌を合唱してくれた。「スンロー ドゥニヤー、パート ハマリー」の歌詞は「耳を傾けて、私たちの話に」というもので、自分の可能性を信じて、夢に向かって進んでいこうという意味が込められた力強い歌である。その他にもMAMTAは、自己紹介やグループメンバーと打ち解けられるような全員が参加できるゲームを企画した。

日本の一行は、ヘルスキャンプリダーである堤氏のオーボエ演奏と合唱による「ひなまつり」(女兒の健やかな成長と幸運を願う行事)と、竹下氏の成人式の着物姿をスライドにし日本の文化を紹介した。1日目、2日目の夜は、学生によるレクリエーションを開催し、白玉だんご作りや、歌・踊り・スナップ写真紹介による異文化交流をしながら宿とともに過ごした。早朝は、日本のラジオ体操で一緒に身体を動かした。

II 研究目的と研究方法

1. 研究目的

本研究では、ナラティブ・アプローチがJICA草の根技術協力事業「インド北部思春期女性自立支援プロジェクト」(以下JICAプロジェクトと省略)のヘルスキャンプに参加した思春期女性のエンパワーメントにどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的としている。

2. 研究方法

対象者の反応や変化を分析するにあたり、ヘルスキャンプ参加者へ思春期女性に影響を及ぼしたと思われる場面についてインタビューを行い、JICAプロジェクトの実践を通じた「語り」の場면을観察法から導き出し、語りが持つ「意味」や「価値」を考察した。

なお、本プロジェクトの写真およびビデオ撮影は、プロジェクトのドキュメンタリー・フィルム制作を兼ねており、撮影については参加者全員の同意と許可を得ている。

III 結 果

インタビューの結果、〈「女性にとって勉強は不要だ」と言われた私の経験の紹介〉〈同年代の日本の女子学生が日常行っている月経の対処方法の紹介〉〈JICAプロジェクトに参加した現地の思春期女性たちが、プロジェクトで得た知識を自分たちの村の仲間に教育しようとする内容を「劇」で紹介〉の「語り」3場面が引き出された。

1. 「女性にとって勉強は不要だ」と言われた私の経験の紹介

筆者である私は、富山県の農村部に生まれ、家は貧しかったが、のどかなところでのんびりと成長した。高校進学を進路を決めるとき、父は「女は勉強なんかしなくていい。女はうまい食事を作ればいいんだ」と言い、女性が勉学することに否定的な態度を示すだけでなく、女性は男性に従えばいいとする男尊女卑の考えを押しつけた。学歴も仕事も持たない母は、自分と同じ苦勞をさせまいと、私に手に職を持つことを勧めた。近所の女性は農家の担い手ばかりで、自分の身近に専門職はおらず、女性が仕事を持つというイメージができない。茫然としている私に、母はさらに真剣な眼差しで「手に職をつければ自分で稼ぐことができる」「この家から外に出なさい」と畳み掛けた。その甲斐あって、私は看護師を目指すことを決意した。だが、それから父から幾度と進学を拒まれ続けた。ある日、看護の専門性を高めるために大学院進学について話を持ちかけたとき、「そんなものは男の行くところだ」と怒りを露わにした。それでも、自分の希望する夢を諦めず自分の稼いだお金で大学院へ進学した。そして今現在も博士課程で勉強を続けている。その実現は、家族の理解や協力に支えられなければ成し得ない。家庭では妻としての役割を果たし、社会では勤めをこなし、そして残った時間を学生の時間とする。妻、社会人、学生の「三足のわらじ」を履いて生活をしている。という自分の経験から、自分の夢は決して諦めてはいけないこと。夢を実現するためには、自分の目標を持ち続けること、そうすれば必ず前進できる。

以上の話を終えたとき、会場から「パチパチパチ」と音がした。次第にその音が大きな拍手となって会場に鳴り響いた。(写真4)

2. 同年代の日本の女子学生が日常行っている月経の対処方法の紹介

月経痛と対処方法について、同年代の3名の女子学生に経験と対処方法について一人ひとりに語ってもらった。

学生1：「私は、月経になると、お腹が痛くなります。でも、お腹を温めたり、散歩などをして身体を動かしたりすると痛みが和らぎます」(写真5)

学生2：「私は、月経痛はあまりひどくありません。でも、月経2日目には、腰が痛くなるので、腰にカイロを貼って温めています」(写真6)

学生3：「私は、月経になると身体がむくみます。だから、身体を冷やさないように靴下をはいて温かくしています」(写真7)

すると、それまで静まりかえっていた会場から突然手が挙がり、何人かが自分の意見を発言した。また自分が指名されるまでずっと挙手したままの女性もいた。それを境に、様々な講話の場面で、思春期女性たちが自発的に、積極的に自分のことを話し、難しい専門用語も一字一句残さずメモを取り、知りたいと思う意欲的な姿勢を見せた。

3. JICA プロジェクトに参加した現地の思春期女性たちが、プロジェクトで得た知識を自分たちの村の仲間に教育しようとする内容を「劇」で紹介

研修2日目の最後は、講義で学んだ大切なポイントを1グループが1ポイントを振り返

り、自分たちの村での状況を考え、ディスカッションを行った（写真8）。その状況を踏まえて、各村のセンター、或いはグループリーダーとしてどのような活動ができるかを劇にして発表した。今回の発表形式「グループワーク＋プレゼンテーションとしての寸劇」は、学びとエンタテインメントが一緒になったもので、特に寸劇はインドの思春期女性たちのなかでも好評のようである。インド現地マネージャーの竹内氏によると、インドの人々は、特技を披露したりすることを好み、劇や歌・踊りは欠かせないという。なお、グループ毎の劇のストーリーの内容については、竹内氏に要約を依頼した。

グループ1：貧血のアドバイス

センターのメンバーが休みがち。他のメンバーが様子を見に行ったら貧血の疑いが。そこで、鉄分の多い食べ物や鉄分錠剤について教えてあげて、貧血が治った、という内容。

グループ2：頭痛のアドバイス

村の女の子は「いつも頭が痛い」と訴えていた。それを聞いたセンターのメンバーがコーディネーターや健康スタッフに聞いて、頭痛対策（水分補給など）を教えてあげた。するとその女の子もセンターに通い始めた、という内容。

グループ3：生理（月経）のアドバイス

センターのメンバーが突然来なくなった。様子を見に他のメンバーが家に行くと、部屋の隅で泣いている。生理が始まったためだ。そこで、メンバーたちとコーディネーターは生理についてお母さんを交えて説明をして、病気でもなんでもないことを教えてあげた、という内容。（写真9）

わずか15分足らずの時間に作り上げた見事なストーリーに、ヘルスキャンプのメンバーは竹内氏の通訳を介さないまま全員が劇を見入ってしまった。彼女たちの話すヒンディー語は全く理解できなかったが、迫力のある演技と表現力には目を見張るものがあった。

IV 考 察

3つの「語り」場面、〈「女性にとって勉強は不要だ」と言われた私の経験の紹介〉〈同年代の日本の女子学生が日常行っている月経の対処方法の紹介〉〈JICA プロジェクトに参加した現地の思春期女性たちが、プロジェクトで得た知識を自分たちの村の仲間に教育しようとする内容を「劇」で紹介〉、の語りを持つ「意味」や「価値」を考察する。

1. 筆者である私が自ら語ることによって気づいた「語り」の真意

ストーリーとは「自分の経験を粹づける意味のまとまり」である。ストーリーを通して、われわれは変化していく自分の人生を認識し、出来事の進展を意識的に眺めることができる¹¹⁾。筆者の語りは、自らの経験を認めるだけでなく、インドの思春期女性に語りかけることによって、自分自身がどのようにその事実を理解していたかを知ったのである。ストーリーという形式で語るとき、私たちは自分の人生の意味を理解することができる。またそのことが、自分と同じ境遇にいるインドの思春期女性へのエールになることに気づ

いた。われわれは常に進行形の人生の中から一コマを切り取って「経験というひと塊」として取り上げ、それに意義を見つけようとする。私の「語り」のストーリーには、女性が勉学することを拒む障壁に対して突破口を切り開いてくれた母親の存在、そして自らの意思で決断した職業の選択、女性が仕事を持つことへの価値、そうした経験の中に女性が自立することの意味が含まれていた。

インドの大地に立ったとき、緑に覆われた農村部が生まれ育った故郷と重なり、内に秘めていた遠い昔の感情を高ぶらせた。このことは人生の中から一コマを切り取って「経験というひと塊」として取り上げ、「現在」とは異なる「未来」を意識しその意義を見つけようとしたといえる。まさに、インド北部の農村部に降り立っている自分が思春期女性と向き合うことによって、この「語り」が生み出されたのである。

思春期女性たちがいつも口ずさむ歌声（娘はみんなの宝物）には、「ハム アンパル カヘラーネ ワーレー：無学と呼ばれるわたしたち」という歌詞がある。その大意は、「無学と呼ばれる私たちが、文字を覚えて読み書きができるようになれば、何も恐れることはない。正しい情報を得、努力すれば健全で豊かな人生が送れるようになる。だからこそ、皆で読み書きを学ぼう！」である¹²⁾。この歌詞には、「女性にとって勉強は不要だ」と言われた私の経験の紹介のストーリーと共通点があった。この歌詞は、自分たちの将来は、学修のチャンスがあれば、そこから無限に羽ばたく可能性を秘めた、意味のある人間であること。女性であることは決して無学でよいということではないことを教えてくれる。会場で湧き起こった拍手は、私へのエールとも解釈できる。それに加えて、拍手をしている思春期女性たち自身に向けたエールとなり、会場にこだまする拍手となった。インドの思春期女性に見守られながら生まれたこのストーリーが、彼女たちの生き方や人間関係にどれだけ影響を与えたかは定かではない。しかし、その場にいた通訳の竹内氏や房原氏は、私の「語り」に対し、インド女性の「非常に大きな共感」があったとインタビューで語っている。どんなストーリーも、記憶という元来始めもなければ終わりもなく、また整理もついていない流れに意味を持たせるためにつくった「区切り」である。

2. 女子学生の「語り」が思春期女性へもたらした意味

女子学生の「語り」は思春期女性へもの凄いパワーを与えた。その「パワー」とは、ジェンダーリソースセンターに集まった思春期女性40名の雰囲気を一気に変えてしまうほどの威力を持ち、その場にいた誰もが同じように感じた現象であった。女子学生の「語り」が思春期女性へもたらした意味と、思春期女性へもたらした「パワー」について述べる。

インドでは月経中の女性は台所に入ってはいけないと聞く。月経中の女性と接触してはいけないという風習をもつインドでは、月経に対する教育は行われていない。2010年に村を訪問した際、「初潮を迎えたとき、誰にも言えず1日ふとんの中で泣いていた」と語ってくれた思春期女性の言葉が今も脳裏を離れない¹³⁾。ある日突然、股間に血がついているのを見た女の子はそれが何なのか知らなかった。女性の身体の仕組みや月経の対処方法を知っていれば、怖い思いをしなくて済んだかもしれないし、自分の身体に起こっている月経について理解できれば、月経を肯定的に受け止めることができたかもしれない。そこで、自分の月経経験と、女子学生の月経経験を共有することで、その悩みを理解し、克

服するための対処方法を身につけてもらおうと、女子学生が日常で取り入れている月経痛の対処方法を、その人のことばで「語り」による紹介をしたものだ。

女子学生が月経痛の経験と自分の対処方法を話すことは、何のためらいもない出来事だったかもしれない。しかし、ここはインド。女子学生のように、恥ずかしがらずに自分の体験を語ることは容易ではない国である。女子学生の「語り」には、自分の経験を役立ててもらいたいという願いが込められていた。最初は、経験談を話したつもりだったかもしれない。ところが、大勢の思春期女性を前にして、自分が月経痛にどう向き合って、どう対処しているかを話すうちに、自分たちが思春期女性に役立ちたいという意味づけが強くなっていった。このように、女子学生が自らの月経のストーリーを「語る」ことには、自己開示という機序と、語りかける思春期女性に対してアドバイスを行うセラピストの部分が含まれている¹⁴⁾。女子学生は、月経痛の対処方法を教えるためのモデルとなり、思春期女性たちの月経痛の対処方法に役立つということを自らの経験から教えてくれた。つまり、思春期女性に沸き起こった「パワー」は、互いの気づきがエンパワーメントをもたらしたといえる。

3. 自分たちにできることを「劇」にしたプレゼンテーション

研修成果を発表する劇では、1つのグループが「月経」をテーマにストーリーを披露してくれた。ある日、一人の思春期女性がジェンダーリソースセンターの活動に突然来なくなった。彼女が突然休んだ理由は何だろうと心配になり、仲間が彼女の家を訪れたところ、月経が始まり家の片隅で泣いていることがわかった。そこで彼女とお母さんに月経は病気でもない何でもないことをアドバイスしたものである。その後のストーリーでは、翌日には彼女が元気な姿で参加できたという話であった。

このストーリーには多くの研修成果が含まれている。女子学生の経験の「語り」を物語として共有し、自分たちが月経にどのように向き合い、どう対処すべきかを教えている。それを仲間に教えるという場面で、月経に悩む女性は救われる。皆の健康を支援するという役割を果たしている。さらに、月経の問題については個人的な問題だとして誰にも話さなかったと思われる女性たちが、実は誰にでもある問題で、しかも月経の捉え方の問題なのだと言うことに気づいてくれている。思春期女性たちがこの研修で学んだことは、月経の対処方法だけではない。仲間を大事に思いそれを伝える勇気、仲間から支えられ再びジェンダーリソースセンターで活動に参加できることの素晴らしさがつけ加えられる。

今回のプロジェクトは、お互いの関係性を超えて、想像をはるかに超える成果を生み出す結果となった。ヘルスキャンプのメンバー一人ひとりの強みを生かしたチームワークによって、メンバー自身の気づきや、メンバーから得た新鮮な学びが、専門家チームの力をよりパワフルなものにした。そうした現地に根差してきた活動の実践が、思春期女性達に自信を身に付けさせた。特に4名の学生さんの活躍なくては成し得なかった。男子学生の房原氏は、「我々日本人は国際協力について、途上国の思春期女性に対し、抑圧されているかわいそうな人々を助けようと思いがちだ。しかし、女の子たちとの交流を経て感じとったことは、『一緒にやろう』という思いが必要だ」とインタビューで語っている（写真10）。つまり、ナラティブ・アプローチを取り入れることは、当事者だけでなく、参加した日本の専門家チームが途上国の思春期女性にどのように関わるべきかを気づく機会と

なっている。

実践活動におけるナラティブ・アプローチの有効性についてはいくつか報告されている。安林は¹⁵⁾、抑圧された自己からの解放と、オルタナティブ・ストーリーの成立を心と体の両面から可能にし、その結果、心身の健康回復と人間形成という教育的効果を促す点にあると述べている。ナラティブセラピーの参加型フィールド授業の効果については、当事者が「自己の語りに対する満足」や「自己受容の深まり」を感じ、「参加によるエンパワメント」を受けていると報告されている¹⁶⁾。

以上より、本プロジェクトにおける思春期女性たちは、女子学生の日常的な「語り」を通して、それを物語として共有し、自分たちが健康問題にどのように向き合い、どう対処すべきかを十分に理解していた。また、思春期女性たちは、「劇」の中で健康に関する知識を共有し、仲間を勇気づけエンパワメントしていた。JICA 草の根技術協力事業「インド北部思春期女性自立支援プロジェクト」における筆者や女子学生の語りと思春期女性の劇による研修成果の発表場面から、本活動において、ナラティブ・アプローチが有用な効果を及ぼしたと言える。(写真11)、(写真12)。

V おわりに

これまでの2年間の活動を通し、「思春期女性の自立支援」とは何かと考えてきた。女性の人生を自分で決めることができるように「知識」を身につけ、それを決断するための「力」を発揮できるように環境を整備するために、我々サポーターが一体となって取り組むことだということを2年間の活動を通して体得した。つまり、それは女性が人生におけるあらゆる選択肢を自分の意思で選びとって生きていくために必要な力、男性と対等に家庭内や社会の意思決定に参画する力「エンパワメント」に尽きる。その学習方法は、栄養でもいい、健康でもいい、とにかく何か自分に自信をつけることが、その人の持っているパワーを強固なものにするという手ごたえを掴んだ。また、女性たちが、大勢の前で「語る」ことは、「人前で話す勇気を持つ」「人前で発言を認められる」という経験となり、自分が価値のある存在とすることができる。それが自分への自信へとつながる。まさにエンパワメントの構図がある。

ヘルスキャンプから半年経過した現在、JICA 青年海外協力隊の下田氏は、思春期女性たちがリプロダクティブ・ヘルスについて堂々と発言していることを報告している¹⁷⁾。思春期女性に対するナラティブ・アプローチによる「エンパワメント」の効果は計り知れない。なぜなら思春期女性のみならず、その家族や地域、そして将来産む子どもたち、次世代にも幸せをもたらすことが可能だからである。

別れの際に「チー」(チーズのチー、笑ってと言う意味)と言いながら私や女子学生の肩を寄せあいながら涙をふいてくれた。本当に心優しくたくましい女性たちであった。

謝辞

このような貴重なプロジェクトに参加する機会を与えていただきました、TPAK 代表近田真知子氏、日本人が伝えたい心も同時に通訳していただきましたインドプロジェクトマネージャー竹内かおり氏、スケジュール調整に奔走していただきました浅野美樹氏をはじめとする

TPAK メンバー諸氏に、心より感謝申し上げます。藤田保健衛生大学医学部病理学、堤寛教授には、本原稿の内容チェック・アドバイスと修正をしていただきました。また、本プロジェクトに参加したメンバー各位には、お産劇やリプロダクティブ・ヘルスに関する講演を行う際をはじめ、さまざまな場面で多大なる協力と助言をいただきました。みなさまに深謝します。

引用文献

- 1) UNDP, Human Development Report. 2010.
- 2) United Nations Department of Economic and Social Affairs Population Division, World Population Prospects: The 2008 Revision.
- 3) CENSUS OF INDIA 2011. <http://censusindia.gov.in/>
- 4) Syeda S. Hameed/鳥井千代香訳、インドの女性たちの肖像——経済大国の中の伝統社会、つげ書房新社、2007.
- 5) Davies, Miranda Women and Violence/鈴木研一訳、明石ライブラリー 4 世界の女性と暴力、明石書店、1998.
- 6) “Because I am a Girl” The State of the World’s Girls 2007, Plan International.
- 7) JICA Partnership Program. <http://www.jicaindiaoffice.org/index.htm>
- 8) 特定非営利活動法人活地球市民 ACT かながわ/TPAK、平成19年度 JICA 草の根協力事業インド北部ウッタラーカンド州思春期女性自立支援プロジェクトベースライン調査報告書、2009.
- 9) ヘルスキャンピインド2010報告書、2010年3月21日～3月29日独立行政法人国際協力機構（JICA）草の根技術協力事業/（特活）地球市民 ACT かながわ/TPAK 発行.
- 10) ヘルスキャンピインド2011報告書、2011年2月16日～2月23日独立行政法人国際協力機構（JICA）草の根技術協力事業/（特活）地球市民 ACT かながわ/TPAK 発行.
- 11) 杉本正毅、ナラティブ・アプローチと自己決定理論、肥満と糖尿病 8 巻 2 号 pp. 289-292. 2009.
- 12) JPP 北インド思春期女性自立支援プロジェクト歌集「娘はみんなの宝物」Mamta/TPAK 制作.
- 13) 奥川ゆかり、インド北部における思春期女性自立支援プロジェクトの実践と展開、椋山女学園大学研究論集第42号社会科学篇 pp. 215-227, 2011.
- 14) 小森康永、【周産期のナラティブ 助産師の語りの世界から】医療者の「語り」がもつ意味、助産雑誌57巻4号 pp. 316-322, 2003.
- 15) 安林奈緒美、養護教諭の「健康相談活動」におけるナラティブ・アプローチの有効性、教育医学55巻4号 pp. 305-312. 2010.
- 16) 石田京子、当事者参加型フィールド授業が当事者に与えるナラティブセラピー的効果、大阪健康福祉短期大学紀要 8 号 pp. 115-122, 2009.
- 17) NGO-JICA Japan Desk, India NEWS Letter. 2011 no. 8. <http://www.jicaindiaoffice.org/>

インド北部「思春期女性の自立支援プロジェクト」におけるナラティブ・アプローチの有効性



写真1 ヘルスキャンプリーダーを務める堤寛教授

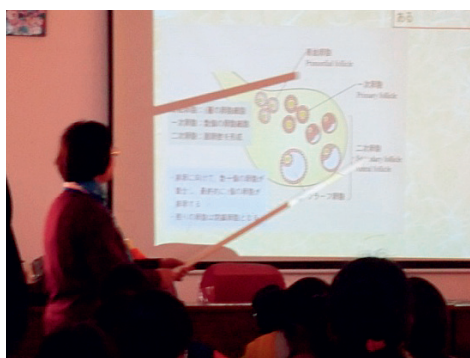


写真2 ヘルスキャンプ講師を務める後藤節子教授



写真3 参加メンバー全員による出産劇



写真4 ヘルスキャンプにて講義を行う筆者



写真5 松浦はるな氏の語り



写真6 落合郁美氏の語り



写真7 竹下美里氏の語り



写真8 グループディスカッションの様子



写真9 研修成果を「劇」にした
プレゼンテーション



写真10 GRCで女性たちに囲まれる
房原篤志氏



写真11 休憩時間に女性たちと交流
(GRC 敷地内)



写真12 研修終了書を授与された
女性リーダーたち

Abstract

Purpose

In this paper I clarify how narrative approach effects the empowerment of this north Indian narrative approach who participated in the health camp of JICA projects.

Methods

By interviewing Japanese participants in the health camp, who educated the adolescent girls about health knowledge, I analyzed the meaning and the value of the narrative scenes.

Results

Through the interviews three narrative scenes, which were introduced to the adolescent girls, were shown as follows;

- 1) My experience about being told no need of study for women
- 2) Japanese female participants' experience about menstrual coping method
- 3) The adolescent girls' own drama about their own education toward their colleagues

I analyzed the above three scenes and got the results their meaning and value.

Conclusion

In this study, narrative approaches were shown to give useful effects to the adolescent girls empowerment through the analysis of three narrative scenes between Japanese participants' and the adolescent girls participated in JICA projects.

Key words: A developing country, Adolescent girls, Narrative approach, Empowerment, Inter professional work (IPW)